

令和5年度 南国市立大湊小学校 学校評価書

校長 吉本 欣彦 印

学校教育目標		人間性豊かにたくましく生きる大湊の子の育成		研究主題	主体的に学習に向かう児童の育成 ～振り返りを活かした複式の授業づくり～	
大項目	中項目	評価指標	取組状況・成果・課題	評価	改善策	学校関係者評価
学力向上	(1)規範意識の育成	①大湊シートの「ルール」や「きまり」についての項目で、肯定的評価88%以上。 ②保護者「学校評価アンケート」の「社会のルールやきまりを守る指導」の項目で肯定的評価95%以上。	①「ルール」や「きまり」に関する肯定的評価は、一学期は <b>93.3%</b> であったが、二学期は83.2%と評価指数を達成できなかった。特に、学習発表会へ向けての休み時間の自主練習の際に、「廊下を歩く」「机やロッカーの整頓」を心掛けることに課題が見られた。 ②保護者アンケートの肯定的評価は <b>95.0%</b> で、評価指数を達成できている。落ち着いた雰囲気の中で学校生活が送れるよう、指導の重点化を図りたい。	C	概ねルールやきまりを守る意識は育っているが、ゆとりの無いときに行動が伴っていないため、主な行事等への準備期間を適切に設定し、落ち着いた学校生活が送れるよう計画・実施していく。また学校内だけでなく、社会に通用する規範意識を育成するために、地域学習や校外学習の場を通して、育成を図ってきたい。	○「ルール」や「きまり」についての項目は評価指数を少し下回っているものの、「話をしっかり聞く」「危ない遊びはしない」は90%を超えており評価できる。課題として「廊下を走らず、歩いている」が低いことから、学校生活の中でゆとりを持って活動ができるよう、児童に見通しを持たせる取り組みが大切である。保護者の回答は95%であり、評価が高い。
	(2)授業改善	①【確かな学力の向上】◇「学習意欲」90%以上。◇各学力調査、全国・県平均+3.0P以上。◇D層の割合全国平均以下。◇「授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいた」県平均以上。	①「難しい問題もすぐにあきらめないでいろいろと考えてみる」の肯定的評価は、一学期 <b>100%</b> 、二学期84.0%。②「授業の時に自分の意見を発表するのは好き」の肯定的評価は、一学期79.2%、二学期76.0%で評価指数を達成できず、学習意欲を高める授業づくり・人間関係づくりで課題が残った。③「勉強がもっとできるようなろうと頑張っている」の肯定的評価は、一学期 <b>100%</b> 、二学期 <b>92.0%</b> で目標指数を達成できている。全体的には一学期 <b>93.3%</b> から二学期84.0%と下降しており、個別最適な学びと協働的な学びの研究を深めることが必要である。	C	対人関係の不安定さから、学習への意欲の低下が見られたため、まずは全校・学級のなかまづくりを通して、安心・安全な学校・学級づくりの土台づくりを行う。学習においては、児童の必然性のある課題提示を行い、学習意欲を高めていく。そして複式授業スタンダードをもとに、個別最適な学びや級友との協働的な学びを通して、充実感・達成感のある授業研究を行う。	○「学習意欲」についての評価数値は1学期より2学期が少し低くなっている。しかし、「勉強がもっとできるようになろうと頑張っている」項目では、92%と目標値を上回っており、評価できる。児童一人ひとりの学力の状況を理解し、教材研究を行い、学習目標が達成できた時には、学級全体で達成感を共有してもらいたい。
	(3)家庭学習	①自主学習コンクールを実施し、家庭学習への意欲が高まる。 ②生活習慣しらすべて児童の家庭学習に関する肯定的評価85%以上。 ③保護者アンケートの家庭学習に関する肯定的評価85%以上。	①自主学習コンクールにて友だちのノートづくりの良さを学び合うことにより、意欲が図られた。放課後学習支援員や地域学校協働本部事業の学習支援員の協力を得て、個に応じた放課後等加力指導を行い、理解の定着と共に意欲を高めることができた。 ②生活習慣調べを年間5回実施し、生活リズムの大切さについての意識付けとなっている。 ③保護者アンケートの家庭学習についての肯定的評価は80.0%で、個別に配慮が必要な児童があり、個に応じた手立てが必要である。	B	自主学習コンクールは、頑張った児童への承認の機会となっており、また放課後加力指導は、教職員全体で関わり、課題改善の中で、学習への抵抗感が和らぎ、意欲向上につながっているため、継続していく。学級では授業と連動した家庭学習や自ら課題設定した自主学習を設定し、学びへの意欲付けを行い、家庭学習の質的向上を図る。保護者連携の中で、生活習慣調べ期間における児童の家庭学習の見守り・承認をお願いし、連携を深めた取組とする。	○自主学習コンクールは児童の学習活動を高めるだけでなく、自分や友だちの良かった点を確認でき、今後の自主学習の参考となる取り組みであり、充実してもらいたい。保護者の回答は80%であり、生活習慣調べの実施とともに、家庭学習の習慣化と内容の充実を図ってもらいたい。
	(4)英語教育の推進	1.「英語科」アンケートで肯定的評価90%以上。 ①英語が好き。②英語は大切だと思う。③英語を使って外国の人と話してみたい。④将来英語を使う仕事をしてみたい。⑤英語を使って、自分たちの地域や日本の文化を外国の人に紹介してみたい。	英語アンケート全体の肯定的評価は88.5%で、評価指数を達成できていない。項目別では①「英語が好き」83.3%。②「英語は大切だ」 <b>94.4%</b> 。③「英語を使って外国の人と話してみたい」77.8%。④「将来英語を使う仕事をしてみたい」55.5%。⑤「英語を使って、自分たちの地域や日本の文化を外国の人に紹介してみたい」 <b>94.4%</b> 。その他「英語の授業は楽しい」 <b>94.4%</b> 、「英語の授業では、自分から進んで学ぼうとしている」88.9%、「英語の授業はよくわかる」 <b>94.4%</b> と、英語授業は肯定的であるが、将来の自分の職業としては考えていない。	C	学年に応じたカリキュラムに改善させながら、児童の実態に応じた授業展開を工夫していく。また、少しずつステップアップさせ、英語活動を充実させていくことで、抵抗感を低くしていく。さらには、将来の職業選択に英語を使う仕事を、抵抗感を低くしていき、児童の職業意識を高め、社会の変化や見通しを情報提供し、キャリア教育と関連させながら英語の重要性を認識させる。英語と日常生活の密接な関係性について感じられるよう、取組を充実させていきたい。	○英語全体の評価は88.5%であるが、「英語は大切だ」「英語の授業は楽しい」の項目では94.4%であり、評価が高い。「将来、英語を使う仕事をしてみたい」の項目は55.5%と低いことから、キャリア教育と関連させ、英語の興味関心を高めながら、学校教育のあらゆる場面で英語を取り入れた活動を実施して、中学校へつなげて欲しい。
生徒指導	(1)道徳教育の推進	1. 大湊シートの「あいさつ」「掃除」について、次の項目で肯定的評価92%以上。 ①自分からあいさつをしている。②掃除をまじめにしている。 ③「教室」や「ろうか」などにゴミが落ちていたら拾うようにしている。	①「自分からあいさつをしている」の肯定的評価は、一・二学期とも <b>100%</b> 。②「掃除をまじめにしている」の肯定的評価は、一学期91.7%、二学期 <b>96.0%</b> で改善してきている。③「ゴミを拾う」の肯定的評価は、一学期83.3%、二学期 <b>92.0%</b> と改善してきている。道徳性項目全体の肯定的評価は、一学期91.7%、二学期90.0%と道徳的価値の醸成は概ね図られている。	B	友好的な人間関係を築くためには笑顔で挨拶する習慣はとても大切であり、「あいさつ」「掃除」の取組は、道徳的価値観の醸成のために今後も継続していく。特に、道徳の授業で気づいた道徳的価値を、学校生活や日常的な場面で主体的に実践化されるよう、特別活動等で評価活動を大切にいく。さらにメタ認知を高め、時や場、状況に応じた行動ができるよう、継続した指導を行っていく。	○「自分から挨拶をしている」項目は100%であり、掃除の項目も96%と高い、日常的に道徳的価値観の育成が図られていることが分かる。今後も主体的な活動を高めていくため、児童集会や学級指導の時間でよかった行動を全体に確認し、全校で道徳教育の推進を図ってもらいたい。
	(2)いじめ・不登校・問題行動等への対応	1. 学校生活アンケートの「いじめ」について、次の項目で肯定的評価90%以上。 ①学級・学校で、まわりの人から嫌なことをされていない。 ②学級・学校で、まわりの人から嫌なことをされている人はいない。 2. 保護者「学校評価アンケート」の「いじめのない学校づくり」の項目で肯定的評価90%以上。 3. いじめ防止対策委員会を定例(月一回)・事案発生毎に開催。	1.「学級・学校で、まわりの人から嫌なことをされていない。」の肯定的評価は一学期77.5%、二学期73.2%。②「学級・学校で、まわりの人から嫌なことをされている人はいない」の肯定的評価は一学期 <b>90.0%</b> 、二学期 <b>92.7%</b> 。関わり合いの中で、認識のズレからトラブルになることが多い。 2. 保護者アンケートの「いじめのない学校づくり」の項目の肯定的評価は85.0%。児童の些細な変化や関係を見逃さず、予防的・未然防止の取組を推進すると共に、事後対応は、速やかに家庭・関係機関等と綿密に情報共有しながら進めている。 3. いじめ防止対策委員会は、月ごとの定例会以外にも、事案発生の際には必ず開催し、全教職員での情報共有を徹底している。	C	学校いじめ防止基本方針のもと、「いじめは決して許される行為ではない」との意識を徹底させる。いじめを起させない学級風土をつくるため、仲間づくりを第一にした学級経営を行う。また、いじめを未然に防止するため、児童の些細な変化を見逃さず、児童との対話や全児童のSC面談を行う。いじめ事案が発生した場合は、定例以外に臨時のいじめ防止対策委員会を立ち上げ、役割分担を明確にし、実態把握・情報共有・方針の確認を徹底し、保護者・教育委員会と情報共有しながら、収束へ向けた取組を継続していく。さらには、教職員の力量向上を図るため、定期的な校内研修を行う。	○「学級・学校でまわりの人から嫌なことをされていない」項目は73.2%であり、今後も児童理解に努め、課題があればいじめ防止対策委員会を持ち、早急に対応してもらいたい。日常的に友だちを認め合う活動を取り入れ、学校全体で学習・生活活動が児童が一体となり、充実していることを実感できるよう工夫してはどうか。
	(3)自尊感情の育成	1. 大湊シートの「自尊感情」について、次の項目で肯定的評価80%以上。 ①自分にはいいところがある。 ②自分のことがすきた。 ③やりはじめたら最後まで頑張ることができる。	①「自分にはいいところがある。」の肯定的評価は、一学期 <b>83.3%</b> 、二学期 <b>92.0%</b> 。②「自分のことが好き」の肯定的評価は、一学期70.8%、二学期 <b>84.0%</b> 。③「やりはじめたら最後まで頑張ることができる」の肯定的評価は、一学期79.2%、二学期 <b>88.0%</b> 。自尊感情項目全体では、一学期 <b>85.8%</b> 、二学期 <b>92.8%</b> と、改善してきている。コグトレや集会・仲間づくり委員会を中心とした「Good jobの木」の認め合いの取組等の成果と考える。しかしながら自己肯定感の低い児童が複数名おり、認められ感を高める個に応じた取組の充実を図る必要がある。	B	場に応じて適切な表現で自分の気持ちや考えを伝えることが苦手な児童が、友だちとの関係性の中ですれ違いが生じ、トラブルに発展することが多い。認知の特性によるものもあり、互いに自己開示しながら自己・他己認識を再構築することが必要である。コグトレにより認知機能を鍛えたり、互いに評価し合う場を保証し認められ感を高めたりすることを通して、自己肯定感の醸成を図っていききたい。また、児童の自主的な企画で、月一回程度全校集団遊びを行う等、仲間づくりの取組を継続的にやっていく。	○自尊感情全体の項目では、92.8%と高く評価できる。「自分を大切にしてくれる人がある」「友だちの言うことはよくわかる」項目では100%であり、今後も学校全体、学級で友だちとのつながりを深め、自己有用感が育成されるように取り組んでもらいたい。
	(4)人間関係づくり推進(児童・児童と教師)	1. Q-Uアンケートで学級満足群の児童65%以上。要支援群の児童数0人。 2. 学校生活アンケートについて、次の項目で肯定的評価90%以上。 ①学校が楽しい。 ②みんなで何かをするのは楽しい。 ③勉強が分かる。④学校の先生は話を聞いてくれる。	1. Q-Uアンケート「学級満足群」の児童は一学期45.8%、二学期 <b>72.0%</b> 。「要支援群」は一学期、二学期共 <b>0</b> 名。認め合いの学級づくりやSCIによる全児童面談を行い、予防的な取組を行っている。 2. 学校生活アンケート①「学校が楽しい」一学期 <b>91.7%</b> 、二学期80.0%。②「みんなで何かをするのは楽しい」一学期 <b>100%</b> 、二学期 <b>92.0%</b> 。③「勉強が分かる」一学期 <b>91.7%</b> 、二学期84.0%。④「学校の先生は話を聞いてくれる」一学期 <b>100%</b> 、二学期 <b>92.0%</b> 。学習集団・仲間づくりの取組を継続して充実させる必要がある。	C	日々の学級での児童の様子や気持ちメーター、Q-Uや学校生活アンケート等の結果分析から総合的に児童の様子を判断し、必要に応じて担任やSCの個人面談を実施していく。友だち同士の人間関係のすれ違いからトラブルとなり、人間関係の不安定さから意欲の低下となっている児童もいるため、学級文化の要となる授業づくりにおいて、生徒指導の三機能を生かしながら、教員・児童間の人間関係づくりを充実させていきたい。	○学校生活アンケートは全体で85.6%であり、目標数値をやや下回っているが、「みんなで何かをするのは楽しい」の項目では92%と高く、教員との信頼関係のうえに児童が一つになって学習活動を進めようとしていることが理解できる。今後も児童理解に努め、学校生活全般で仲間づくりが図られるよう、個々の活動の中で児童の良かった点などについて、評価してもらいたい。
家庭・地域・学校の連携	(1)保幼小連携の推進	①「幼児期の終わりまでに育って欲しい10の姿」とスタートカリキュラムを基に、継続的な保幼小連携が図られる。 ②支援引継ぎシート等を通して、配慮の必要な児童の確実な引継ぎ100%。	①校区に保育所がなくなり、保育・幼稚園所との児童交流は限定された行事のみとなったが、教職員の交流や研修、支援引継ぎシートをもとにした新入児の引継ぎを行うとともに、保幼小接続期のカリキュラムの充実を図っている。保幼小連携協議会では、児童の情報共有を行い、指導・支援を活かすことができていく。	B	支援引継ぎシート等を通して、配慮の必要な児童の確実な引継ぎを行うと共に、児童の実態に応じた保幼小接続期のカリキュラムの充実を図る。また、中学校ブロックの保幼小中教職員研修を継続し、情報共有を図る。	○支援引継ぎシートの活用を図り、配慮の必要な児童の支援に役立ててもらいたい。また、保幼小中の円滑な移行が進められるよう、中学校区ブロック研修会で研究内容を協議し、研修を実施してはどうか。さらに、保幼小中のそれぞれの学習や生活課題等をお互いに理解し合うことが大切である。
	(2)防災教育の推進	①「学校評価アンケート」の防災に関する項目で、児童・保護者の肯定的評価90%以上。	①学校評価アンケートの防災に関する項目で、児童の肯定的評価は、一学期 <b>95.8%</b> 、二学期 <b>99.2%</b> 。保護者の肯定的評価 <b>100%</b> 。PTA自主防災組織を立ち上げ、学校・保護者・地域が連携して大湊小南避難タワーの管理の一翼を担い、運営マニュアル・備蓄品の充実を図っている。	A	場に応じた安全確保・避難行動が取れるよう、多様な場面を想定した防災避難訓練を実施し、命を守る安全教育の充実を図る。また、保護者・地域と連携した地震・津波避難訓練や大湊小PTA自主防災組織を中心として大湊小南避難タワーの管理・運営の充実を図る。	○防災教育について、児童の肯定的評価は99.2%、保護者は100%となっており、防災に関する意識は高い。普段から災害に対処できるよう、今後も学校・地域で取り組み、続けてもらいたい。
	(3)地域との連携	①学校運営協議会、学校支援委員会の年3回開催(授業参観及びアンケートをもとにした協議・懇談)の実施。 ②大湊防災連合会と共催した地域ぐるみ防災Day(避難訓練等)の実施。	①コミュニティ・スクールとして、学校運営協議会(学校支援委員会)を年3回開催し、協議・懇談、情報共有を図ることができた。 ②大湊防災連合会・消防分団等と連携した地域ぐるみ防災避難訓練を実施し、南海トラフ地震への意識とスキルを高めることができた。学校評価アンケート地域連携の項目の肯定的評価 <b>97.5%</b> 。	A	コミュニティ・スクールとして、安全(防災・交通)教育を軸に、地域と連携した取組や情報共有を行い、地域に根差した学校運営を行う。大湊の「人・もの・こと」の良さを感じさせ、地域学習やキャリア教育を充実させ、大湊の未来の主体者となる児童の育成を図る。	○コミュニティ・スクールを年3回実施でき、学校経営・教育内容・行事等の確認を行い、地域との連携が深まった。コロナウイルスが5類に移行したことから、地域の人が講師になった昔遊びが4年ぶりにでき、児童との交流が深まった。コロナ禍で地域行事への児童の参加がない状況が続いているが、今後改善を図っていき、学校・地域の連携をさらに深めていきたい。
	(4)学校からの情報発信の充実	①学校だより、HPIによる学校の取組の情報発信、月一回以上。 ②「学校評価アンケート」の情報発信に関する項目で、肯定的評価90%以上。	①月一回以上の学校だよりやホームページの更新、定期的な学級だよりの発行等により、児童の様子や学校の取組を情報発信することができた。 ②学校評価アンケートの情報発信に関する項目の肯定的評価は <b>90.0%</b> で、評価指数は達成できた。	A	参観日や学校運営協議会、学校支援委員会等の協議の場や、地域ぐるみ避難訓練等の学校行事等により、児童の学校生活の様子を参観いただく。また、月一回以上の学校だよりやホームページ、定期的な学級だより等により、児童の様子や学校の取組を継続して情報発信していき、学校運営について家庭・地域と情報共有を図っていききたい。	○保護者の情報発信に関する項目の肯定的評価は90%であり、評価指数を達成している。今後も学校だより等で児童の活動の素晴らしさを地域・保護者へ伝えてもらいたい。また、地域・学校の連携をより一層深めていきたい。

( A:目標を上回った B:ほぼ目標どおり C:目標を達成できなかった )

学校関係者評価を踏まえての改善点  
 1 学力向上:LD研・生徒指導の四視点を生かした授業改善等の教員研修の充実を図り、教員の授業力向上を図ることで、学力の下支えとなる規範意識や主体的に学習に取り組む意欲を高める工夫を行う。キャリア教育と関連させ、英語の興味関心を高め、「将来英語を使う仕事をしてみたい」と考える児童の育成を図っていききたい。  
 2 生徒指導:Cog-Trや児童主体の仲間づくり等の取組、応用行動分析学の基礎を活かしたSWPBS等を通して、いじめ・不登校・問題行動の未然防止の取組の充実を図る。特活において児童の良いところや適切な行動に積極的に注目し、肯定的な働き掛けを行い、価値づけすることで良さを伸ばしていききたい。  
 3 連携:中学校ブロックの保幼小中合同研修により、接続・連携の充実を図る。通信やHPによる情報発信の更なる充実と工夫を行い、学校と家庭・地域との情報共有を図り、連携を深めていききたい。